慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	架空のもの・実在しないものの名について：アベラールとJ.S.ミル
Sub Title	On names of fictitious things and things which do not exist : Abelard and J.S. Mill
Author	町田, 一(Machida, Hajime) 山口, まり子(Yamaguchi, Mariko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.102 (1997. 12) ,p.15- 36
JaLC DOI	
Abstract	Although we speak of fictitious person or things in books, films, or in our imagination very frequently and without any hesitation, the status of the names of fictitious things or things which do not exist has been quite ambiguous and problematic in logic. In this small paper, we would like to consider whether the sentences which include these names are susceptible of truth or false, by mentioning Abelard, who insists that the existence of a name is inseparably connected with the existence of a thing which is signified by the name (or at least, an evidence of the thing's existence), and J.S. Mill, who insists that the existence of a name does not necessarily demand the actual existence of a thing which is denoted by the name.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000102-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

架空のもの・実在しないものの名について**
——アベラールと J. S. ミル——

町田　一*・山口まり子*

On Names of Fictitious Things and Things which do not Exist
——Abelard and J. S. Mill——

Hajime Machida

Mariko Yamaguchi

Although we speak of fictitious person or things in books, films, or in our imagination very frequently and without any hesitation, the status of the names of fictitious things or things which do not exist has been quite ambiguous and problematic in logic.

In this small paper, we would like to consider whether the sentences which include these names are susceptible of truth or false, by mentioning Abelard, who insists that the existence of a name is inseparably connected with the existence of a thing which is signified by the name (or at least, an evidence of the thing's existence), and J. S. Mill, who insists that the existence of a name does not necessarily demand the actual existence of a thing which is denoted by the name.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）・日本学術振興会特別研究員

** 中川純男委員より提出 (Communicated by Prof. Sumio Nakagawa).

我々は，日常生活において，何のためらいも抵抗もなく架空の人やものの名，かつては実在していたが今はしていないものの名について語り，何らかの判断をする．だが長い論理学の歴史において，こうした名を含む文は，多くの論理学者・哲学者から，真偽が問えないもの，あるいはどんな場合でも偽であるものと考えられてきた．だが，果たして本当にそうであろうか．「キマエラはライオンの頭を持ち，蛇の尾を持ち，山羊の胴を持ち，火を吹く動物である」という，いわゆるキマエラの定義は，偽なのだろうか．

こうした疑問を契機として，我々はこの小論で，アベラールと J. S. ミルの説を通じて架空のものや実在しないものの名と，それらの名を含む文について考察する．アベラールもミルも，アリストテレスに始まる伝統的論理学の枠内にあるものの，時代背景・哲学的基盤は大きく異なっている．だが，それにもかかわらず，彼らは（各々理由は異なるにせよ）架空のものの名・実在しないものの名を含む文に，他の多くの哲学者が認めなかった積極性を認めようとしている点で一致している．また，言葉と言葉が指すものとの関係はいかなるものであるか，架空のものや既に実在しなくなったものの名を含む文は，いかに扱われるべきかといった，現代においても議論され続けている問題を考察する際，先人としての彼らの説を例に挙げ，各々を検討し，比較し，批判してみることは有益なことだろうと思われる．

ものと言葉，言葉と世界のつながりがいかなるものであるかについて，I 章では中世の論理学者アベラールの説を，II 章ではフレーゲ，ラッセル等によって論理学が大きく変貌する一歩前に位置する J. S. ミルの説を挙げ，批判・検討してみたい．

I

「ひとりの人間も実在しない時に，『人間は動物である』は真か」あるい

はもはや実在しないカエサルについて，「『カエサルは人間である』は真か」といったテーマの論文が中世のある時期に量産されていることがわかってきつつある[1]．さらにキマエラや山羊鹿，不死鳥といった類いの名は指示対象を持つのか，持たないのかということに関するソフィスマタ（詭弁論）が，特に，12–14世紀に頻出していることも明らかになりつつある[2]．こうして，中世における非実在の名や架空のものの名の論理的処理を，今日ようやく，我々は原典をもとに検討できるようになってきたのであるが，特筆すべきはアベラールのこれらの名の扱いに対する深い関心であろう．アベラールは次に見るように，かつての実在の名であっても，架空のものの名であっても，それらがあらわれるある種の肯定文を真な定言とみなす立場をとる．そして，その論証過程においてありありとうかがえるのが，命題の真と実在に裏打ちされる現実とは，一枚の紙の裏表のような関係にある，という考え方である．

i

通説によれば，中世においては全称定言には存在措定 existential import が課せられると言われる[3]．全称詞「すべての 'omnis'」に続く名の指すものすべての実在によって，全称定言は真である，ということなのだが，アベラールもこの通説において例外ではなく，晩年の著作『ディアレクティカ』では，「すべての人間は動物である」は「すべての人間」の消滅とともにその真は消え去ると言っている[4]．さらにアベラールは，全称定言のみならず，特称・単称定言であっても事情は同じであることを説き[5]，「定言の真は，ものの実在にかかわる，ものの現実を命題化する」と主張するに至る[6]．

では，この主張からいかにして非実在や架空でしかないものの名があらわれる文を真な定言とみなす立場が導かれるのであろうか．

問題の核心は，定言におけるコプラ解釈と，定言の真が命題化するとこ

ろの「現実‘actus’」とのかかわりだと思われる．そして，筆者はこの「現実」は，コプラに対する時制の干渉を含意している，と解したいのだが，これについてアベラールに即して考えてみたい．

『ディアレクティカ』編者の大御所 de Rijk はアベラールのコプラの用法を次の三つに分ける(7)．

a. 実在を指す述語．

「ソクラテスがある」

b. 存在量化を課すもの．

「人間は動物である」

c. 「呼ばれる‘vocatur’」という意味のみもつもの．

「キマエラは想像可能である」

アベラール自身は a. を「第一次的用法‘primo loco’」と，b. と c. とを「第二次的用法‘secundo loco’」と呼んでいる(8)．a. のタイプのコプラ（つまり述語）が実在を前提しているのは明らかである．アリストテレス以来，述語動詞には常に時制の干渉があると考えられてきたことは，a. においてもあてはまると思われる．つまり，a. には時制の干渉がある(9)．

b. については，アベラールは c. とをあわせて「第三の挿入‘tertium adiacens’」とみなしていることを，de Rijk は的確にとらえている．しかし，「第二次的用法」つまり「第三の挿入」としてのコプラの用法には，b. のように主語の指すものを直接要求する意味でのコプラに対する存在量化と，実は，c. における非常に複雑な仕方で実在に干渉する存在量化とがあることを，彼は見逃している．分類として，c. を b. から区別する理由が適当ではないように思われるのである．

c. については，確かに『ディアレクティカ』以前ではアベラールは，de Rijk の言うような主張をしているところがある(10)．が，『ディアレクティカ』では，c. は同格 appositio の意味ではなく（例えば，「私はペトルスである」は，「私はペトルスと呼ばれる」に他ならないという，第一

人称についての記述は『ディアレクティカ』にもあるが）附帯的な述語づけとしての対置 oppositio の意味で扱われるべきだ，と述べている[11]．この一方で，de Rijk は b. に 'consignificatio temporis' つまり時制の干渉があることを見抜いているが，やはり c. も「ものの実在にかかわる現実」を措定する点で，時制の干渉と無関係ではない点にはふれていない．そもそも，あるコプラを「呼ばれる 'vocatur'」で置換可能とする説は，アベラールの一貫した主張なのかどうか疑わしいと言えよう．

では，b. と c. とは何を理由に区別されねばならないのか．

これは，アベラールが非実在や架空のものの名があらわれる文を扱う態度において，次のように考えられるべきだと思われる．

ii

d. 「ホメロスは詩人である」

e. 「キマエラは想像可能である」（例文自体は c. と同じ）

これらの文はいずれも，「第二次的用法」つまり「第三の挿入」としてのコプラを持つ[12]．先の分類では，c. にあたる．

d. は単称定言であるが，先のアベラールの定言論によれば，ホメロスの実在が前提されねば偽である．ホメロスが生きている時に限って真なのだから，そこにおけるコプラの意味は b. でなければならない．もし d. がホメロスの死後も真であり続けるのならば，c. と言えようが，しかし，あらゆる定言に存在措定を課すと，アベラールの立場をみるのならば，一体どうやって c. の説が成立しうるのか？　非実在はおろか架空のものの名を定言として表現できるのか？　アベラールのコプラ理論には，d. や e. を真とみとめると同時に，矛盾が生じるのではないか？[13]

そうは言えないのである．

アベラールの立場は，コプラに対する存在措定と時間とのかかわりが緊密に結びついている点において一貫しており，まさに c. の説は非実在と

架空のものの名を扱うために，「実在にかかわる現実」を命題化するべく，b. とは違う複雑な仕方でそうした存在措定と時制の干渉とを要求しているのであり，ここにおいて「c.='vocatur'」という説明が不十分であることもはかり知りうるのである．

d. はなるほど，ホメロスの生きている時において真な命題だと言われている[14]．ホメロスの死滅後は，例えばアベラールの「先生」の見解では，構文論的表現として理解されるが「不適切な言い回し 'impropria locutio'」であり，真偽を問える命題ではない．e. も同じように言われている[15]．

アベラール自身は，d. に関しては，ホメロスが実在したということを手掛かりに（本当にホメロスという個人（？）がかつて存在したのかどうかを疑うということはアベラールの念頭にはない）「ホメロス」という名がホメロスその人自身を指定する designare 場合と，ホメロス自身ではなくて，ホメロスの書き残した詩歌を限定する determinare 場合とを区別し，d. が真な命題といえるのは，後者における「ホメロス」の使用においてであると言う[16]．つまり，d. は「ホメロス」の限定作用 determinatio によって，真な命題とみなされるのである．従って，d. におけるコプラは直接，b. のように主語の実在に干渉することはないが，間接的に，存在措定が課せられると考えてよかろう．そしてやはり，d. が現実的真理を示すということには，d. が発話されているその時点が「現実 'actus'」というアベラールの表現において含意されているように思われる．でなければ，d. を真な命題とみなさなくてもよいはずである[17]．

他方，「キマエラ」は非存在 non-existens を指定し，e. におけるコプラには何ら実在は前提されないと，アベラールは言う．

「もしコプラが何か実在を述語づけているとみなされるのなら，『キマエラは想像可能である』，『非人間である』，『非存在である』が措

定するところの命題は，偽である」[18]

「キマエラ」が非存在である，とはそれには何の属性もないということであり，「キマエラ」の何らかの性質が「想像可能 'opinabilis'」であると言っているのでもない．「実在にかかわる」のは人間の精神である．

「こうしてキマエラが想像可能であると我々が言う時も，何もキマエラに帰属させてはおらず，むしろキマエラを想像する何ものかの精神を示しているのである」[19]

非存在はあくまで非存在であって，どのような意味においても存在ではない．つまり，例えば，キマエラを神話世界における存在としてアベラールは扱ったりはしない．筆者にはこの態度は賢明であると思われる．架空のものに，ある文脈で属性を与え，その表現を真な命題とみなすのなら，その命題と，現実世界における実在者について述べられた真な命題とを区別しうる基準をどこに求めればいいのか．「サザエさんは主婦である」と（現実に存在している人物を指して言われる）「井上ひさ子は主婦である」とがまったく同じ次元で真であるなら，架空のものと実在者との性格は，一体何が異なっているのか．現実世界と想像可能な世界とを命題の真を通して結びつけるのは間違っているのではないか．しかし，では，可能な命題は真ではありえないのか．そんなことを言っているのではないのである．問題は，可能性の領域についての命題の成立なのではなく，あくまで想像可能，もっと言えば存在としては不可能なもの，その名の命題における扱いなのである．筆者が，アベラールに同調するのは，非存在の名も実在の名も，人間がそれら非存在・実在を論じるために規約的に設定したものであって，そうした名を用いて真な命題をつくりうる，という点である．アベラールは言う，

「非存在の名がおかれている命題もなぜ本来的な言い回しと言おうとしないのか．キマエラが非人間であると本来的に言われるように，即ち人間でないもののひとつと本来的に言われるように，なぜ想像されうるとも言われないのか．即ち，想像がそれについて持たれるもののひとつとなぜ言われないのか．非存在に対するそれ自身の名の設定と，実在に対するそれ自身の名の設定とは同じことなのである．『人』の設定において『このものが人であると言われる』と言われたのと同じように，非存在においてもこう言われたのである，つまり『そのものは想像されうると言われる』と．非存在の名でさえそれ自身を扱うために（その名の）設定に到達するのに応じて，発案されたものなのである．ちょうど実在の名がそれ自身を扱うために発案されたのと同じように．例えば，『キマエラはキマエラである』とか『人間あるいは他の何かに対置される』と言われる時のように．」[20]

e. が真なのは，「キマエラ」という名が非存在，つまり想像可能（あるいは現実世界においては不可能ではあるにせよ）なものを論じるという次元においてであり，「キマエラ」に何らかの属性を規約的に我々が与えるという次元においてではない．ここが次章でみる J. S. ミルの立場と大きく違うところでもある．（先にも述べたが筆者はアベラール的見解に与する．）そして，e. においても，アベラールの言う「実在にかかわる現実」は「キマエラ」という名を通して措定されている．しかしこの時，d. において「現実」が発話時点という時間の干渉を課せられうるとしても，e. に対して同じことが言えるかどうかは疑問ではある．とはいえ，いずれにせよ，コプラには「現実」という時間と密接なかかわりのある，あるいは発話時点の文脈的かかわりをそう簡単には無視できない何らかの干渉が課せられると言えるのではないだろうか．

こうして，アベラール的定言の真は，常に何らかの形で実在にコミットしようとする，現実的真理とみなされると言えよう．先にも述べたが，筆者はe. に対して同調的ではあった．しかし，d. の限定作用を，主語の指すものの絶滅以後にかぎるのは間違いのように思われる．ホメロスの生存時においても，「ホメロス」でホメロスの詩歌を指すことは十分可能なことである．指定作用 designatio と限定作用とは切り離すべき関係にはないのではないだろうか．つまり固有名（に限らず一般名でもおそらく）に対する，存在量化を伴う命題のみが真であるという立場には，大きな疑問が生じざるをえないのではないだろうか．

以上のように，アベラールは定言の成立における核心であるコプラを，「第一次的用法」と「第二次的用法（＝第三の挿入）」との二つに区別したのだが（その理由は，実在と非存在との名の論理的処理にみられる，と今まで論じてきた），この区別は，『論理学体系』の著者，J. S. ミルにおいてもみられる，と de Jong は述べている．さらに de Jong は，ミルのいう本質命題におけるコプラが，アベラールのいう「第三の挿入」としてのコプラにあたる，と説いている[21]．

ミルのいう本質命題とは定義に等しく，主語の実在にかかわりなく述べられるものである．アベラールのいう「第三の挿入」としてのコプラは，先にみた通り，複雑な仕方で常に実在にかかわると同時に，現実的真理を措定すべく，時制の干渉が課せられうる．従って，筆者にはむしろ，ミルのいう偶然命題 real proposition（事実に関する事柄を主張する命題）におけるコプラこそ，「第三の挿入」としてのコプラに近いように思われる．

というのも，時制論理の先駆者 Prior が指摘したように[22]，ミルは命題に対する時制の干渉を述語に対してではなく，コプラに対して課すべきものと考えており，その時の命題は偶然命題として表現されるからである．次のようにミルは述べている．

「我々が過去・現在・未来であると主張するものは，主語が表示するものでもなく，述語が表示するものでもなく，述語づけが表示するもの，すなわち命題の項の片方，あるいは両方によってではなく，命題それ自身によってのみ表現されるものなのである．従って時間的条件（時制の干渉）は述語に対してではなく，述語づけのしるしであるコプラに属するとみなされるのが適当である」[23]

このように，コプラに対するある仕方における解釈では，ミルとアベラールとには共通点が認められよう．しかし，ミルはアベラールのように定言の真は常に実在にかかわる現実的真理を意味するとは考えてはいない．これは，ミルの本質命題と偶然命題との区別からも明らかである．しかも，ミルは，架空のものの名の指示対象 denotation に属性を帰属させることを認めるのであり，ここで，アベラールとは大きく異なる独自の意味論を展開することになるのである．

II

フレーゲやラッセルによって述語の概念が，論理学が，大きな変化を受けるほんの少し前に位置する J. S. ミルにおいては，架空のものの名や，実在しなくなったものの名など，名の指示対象が実在しないケースは，どのように考えられているだろうか．

i

ミルは基本的に，命題は，主語によって指示 (denote) されるものが，述語によって共指示 (connote) される属性を持つことを表す，と考えている．故に，彼によって，共指示内容 (connotation) を持たない語と見做されている固有名は，述語にはなれないはずである．一方彼は，一般名も個物を（もしそのような個物がある場合は）指示すると考えるので，文にお

いて主語となるし，フレーゲが固有名の一種と考えた確定記述については，それは一般名を用いて記述されているので共指示内容を持つと述べている．それ故に，上の彼の定義に従えば，述語となることも可能になるだろう．つまり，コプラとはさんで両側に置かれる語は，彼の定義に従えば，常に置換可能である訳ではない（固有名のような non-connotative names は述語にはなれない）．

ではミルは，架空のものを含め，指示対象が実在しない名について，どのように考えているだろうか．彼にとって名辞は，指示対象しか持たないもの（例えば固有名）と，指示対象と共に共指示内容（その名によって指示される複数のものが共通に持つ属性・性質）の双方を持つものの二種類に区別されるが，とにかくどんな名辞も，それが何かの名である限り，何かを指示することになる．このことと，'Names are names of something, real or imaginary' という彼の言葉を併わせて考えてみると，彼は架空のものの名についてもそれは何かの名であり，何かを指示すると考えていることが分かる．

だが，この「指示する (denote)」，あるいは「指示対象 (denotation)」という語については，慎重に扱わねばならない．先に見たアベラールは，例えば「キマエラ」は「何か (aliquid)」を表示する (significare) と言い[24]，その何かは実在するものかどうかは分からないものなので，非存在を指定する (designare) と言うまでは，「キマエラ」が何を指しているのかはっきりしないと考える．勿論ミルとて，「キマエラ」が，実在しているものを表す名と同じ意味でこの世に実在するものを指示しているなどとは考えない．これは彼が，「ドラゴン」を例に挙げながら，この語の定義としての「ドラゴンは火を吹くトカゲである」という文は正しいが，ここでいう「ドラゴン」について，我々は如何なる現実の存在をも仮定・前提 (postulate) してはいない，と述べているところでも明らかである．彼による共指示語・非共指示語の定義，「非共指示語は何かを指示するのみ

で，（対象間で共通に持たれる属性を）共指示はしない．共指示語は指示する以外に共指示もする」と，上記の引用，「名辞は，現実の，あるいは空想上の何ものかの名である」を併わせて考えるなら，先にも述べた通り，名辞は全て（現実/空想における）何かの名であり，その何かを指示するということになるだろう．指示・共指示という概念を導入する一方で，彼がしきりに主張することは，名辞が何ものかの名であると言う時，それは決して我々の中にある，そのものについての主観的な観念ではない，ということだ．言葉が表すものは，個人的な心的表象のたぐいではなく，客観的なものだということを主張しているのである．

ミルにとって，名辞が何かを指示することと，それが現実に存在していることとは同義ではない，という点も見逃してはならない．このことは，次の彼の言葉からもうかがえる．

> 「…名辞が表示するもの (signification) にとって，その名を冠することのできるものがたくさんあるか，たった一つしかないか，あるいは全くないか，ということは，少しも重要なことではない．『神』はキリスト教徒やユダヤ教徒にとっても多神教徒にとってと同様，一般名であり，『ドラゴン』や『ヒポグリフ』，『キマエラ』，『人魚』，『おばけ』なども，これらの語に対応する対象が現実に存在した場合と同様，一般名なのである．どんな名辞も，その表示するものが属性から成るものは無限に多くのものの名となりうる．しかしそれが現実に何かの名である必要はない（注：つまりそのような名で呼ばれるものが現実に存在している必要はない）し，もし何かの名であるなら，たった一つの対象の名であってもかまわない．我々がある名を，属性を共指示するように用いるや否や，そうした属性をもつものは，その数が多かろうと少なかろうと，事実上あるクラスを構成する．だがこの名を述語づける際，我々はただ属性のみを

述語づけるのであり，あるクラスに属しているか否かという事実は，通常全く視野には入ってこないものである」[25].

この説明は，指示対象と共指示内容の両方を持つ一般名について述べられていて，固有名は考慮されていない．一般名については，例えば「人間」という語は，ミルによれば，太郎や良子やジョンやスーザンといった個々の人間——特に現在存在している人間に限らず，過去や未来においても以下に挙げるような共指示内容を持つもの——を指示し，且つ，理性を持ち，生命を持ち，肉体を持ち，ある特定の外形をしているという性質を共指示する．ここで既に明らかだろうが，少なくても共指示内容を持つ一般名に関する限り，ミルが名辞の denotation として挙げるものは，何も今現在実在しているものには限られない．上記のような connotation を持つものを「人間」と呼ぶ規則ができたなら（複数の個物において共通に観察される性質を一般化することによって，そうした性質を持つものをある語で表すことが決まったなら），過去においてそのような性質を持っていたものも人間だし，未来において持っているものも人間である．また，人間という種が絶滅したとしても，その語に意味がなくなる訳でも，その語を含んだ文の真偽が問えなくなる訳でもない．もっとも，我々の言語を理解できるものが他に存在しない場合に尚，我々の記号に意味があるかどうかは疑問である．先の章で見たアベラールが，この疑問故に「人間は動物である」は人間が消滅すると共にその真も消滅すると言ったのかどうかは，今となっては知る由もないが，「ドードーは鳥である」は彼の説では偽になるのに対し，ミルは真であると言うだろう．ミルは繰り返し言葉の意味に，その語が指示するものの実在を含むのは誤りだと主張する．こうした考えに従えば，例えばラッセルのように，実在しないものの名を含む文は，内容の如何を問わず全て偽となる，ということにはならないだろう．

ところで，キマエラやケンタウロスといった想像上のものについても，先に述べた通り，ミルは，指示対象と共指示内容を持つと考えている．だがこの場合「共指示内容」と呼ばれている性質は，個々のケンタウロスやキマエラを観察することによって得られるものではないはずである．これらの語の「共指示内容」とは，ミルが言うような意味での，複数の対象が共通に持つ性質・属性の観察を一般化したものではない．キマエラやケンタウロスの持つ（と考えられている）性質とは，人間がある神話の中で付与した，実際にはないものである．この場合，我々らこれらの語の「共指示内容」の源を，我々の規約に求めねばならないだろう．

アベラールとは異なり，ミルは先に挙げた「ドードーは鳥である」も，「キマエラはライオンの頭と蛇の尾と山羊の胴を持ち，火を吹くものである」も正しい，と言うだろう．つまり，実在するものの名にせよ，既に実在していないものの名にせよ，架空のものの名にせよ，それらがある共指示内容を持つのなら，その共指示内容を述語づけた文（ミルはこうした文を「本質命題」と呼び，定義を形成すると考える）は正しいと考え，そうでないものは誤っていると考えるだろう．彼はそれらの文を「(定義として）正しい」と言う．この言葉を，「真である」と同義と見做すことは危険をはらむ．ミル自身は本質命題について，その全称肯定命題は真になると言う一方で，そうした命題（本質命題）を‘merely verbal propositions’と呼び，カントの分析命題と類比した上で，「厳密な意味では真偽を問えない」と言っているからだ．だがこれは，人間の観察が有限のものであり，定義は時と共に変化する可能性を免れず，こうした命題は，我々の，語の使い方を述べたものでもある，という彼の考えを背景に述べられた言葉であろう．とすれば，架空のものの名・実在しないものの名についての本質命題は真であると，敢えて危険を冒して言うこともできるかもしれない．

ii

ここまではミルの一般名についての説からの考察をしてきたが，彼によって固有名はどのように扱われているのだろうか．共指示内容をもたず，指示対象しか持たないという固有名についても，一般名の場合のように指示対象が実在しない名を含む文について真偽が問える（あるいは正誤が言える）と認め得るだろうか．「ハムレット」や「サザエさん」，「アトランティス」などはどのように扱われるだろうか．ソクラテスやキリストなどが存在したことを疑う人がいるが，大昔に存在したといわれる人の存在など，疑おうと思えばいくらでも疑える（特にこの二人のように，存在の証となるようなもの――書物など――を何も残さなかった人の場合は．だが，たとえ何か証になるようなものを残したところで，それが他の誰でもなくその人の存在の証かどうかは，再び懐疑の対象となり得るだろう）．――ミルの固有名についての説は，クリプキなども言及している箇所を引用してみたい．

> 「確かに我々は，あるものに，他の名ではなくある特定の名を冠することに理由があると言ってよいだろうし，それは本当のことだろう．だが名は，一度名づけられたなら，そうした理由からは独立したものだ．ある人は父親の名がジョンであったためにジョンと名づけられたのかもしれないし，ある町は，ダート川の河口に位置するためにダートマスと名づけられたのかもしれない．だが，ある人の父親が彼と同じ名を冠しているということがジョンという語が表示すること (signification) の一部を成しているのではないし，ダートマスの場合でさえも，ダート川の河口にあるということは，この語が表示することの一部ではない．もし砂が河口を詰まらせたり，地震で水路が変わるなどして，この町が河口から離れてしまったとし

ても，町の名を変えねばならないということはないだろう．それ故に，事実というものは，言葉が表すことのいかなる部分をも成さない．そうでないと，その事実が真でなくなった時，その名を用いることが出来なくなってしまうからだ．固有名は対象自身につけられたのであり，その対象のもつ，いかなる属性の持続にも依存しない．」[26]

赤子の時と成人してからでは，ある人の持つ性質は大きく異なるにもかかわらず，同じ名で呼ばれ続ける．ある時点でのある人の性質がその人の名の一部ではないことは明らかだ．この点，フレーゲやラッセルの，固有名を省略された記述とする説を批判するクリプキは正しいだろう．ではある人の実在についてはどうだろうか．その人が死んだ後でも，その人を思い出し，語る人がいる場合，その時述べられる名はその人を指示するだろう．「実在している」ということもミルのいう「事実」であり，それは彼曰く，言葉の表示するもの（意味するものといってもよいだろう）の一部ではないのである．つまり，ある言葉，ある名が実在していることから，その語が指示する対象が実在するという事実を引き出すことは出来ない．ミル曰く，ものの存在とは，言葉の意味の一部として含まれているのではなく，我々によって前提・仮定 (postulate) されているものなのである．

もっとも，個物のもつ諸性質（諸事実）を，その個物を指示する固有名の共指示内容と見做すことはできない．ミルにとって語の共指示内容とは，その語が指示するものが共通にもつ性質（属性）であり，先に挙げた「人間」の例にも見られるように，この名で呼ばれるための必要条件であり，類や種の本質と言い換えてもよいものである．だが，種の構成員である個物については，ある特徴・性質を持つことがそのものにとって本質的であるといえるかどうか疑問であるからだ．

ミルの言う通り，名辞の意味にその名の指示対象の実在を含意させるこ

とは（本章の筆者にとっては）誤りであると思われる．一般名についてと同様，固有名についてもこうした立場を取るならば，固有名のように働き，且つ指示対象が実在しないものの名についても，その名が現れる文は真偽の問えるものとして扱い得るのではないだろうか．「ハムレット」や「サザエさん」についても，これらの語が実在するということから，これらの語が指示するものが実在することを必要とはしなくてもよいだろうし，これらの語を含む文が，指示対象がないからという理由でどんな場合にも偽になったり，あるいは真偽が問えない，ということにはならないだろう．フィクションの中にあらわれる人物・諸事物は，その話の中においてある特定の属性が課せられているのであり，そうした属性を示す何らかの言葉を，それらの名に述語づけた場合，その文は真になると言えるのではないだろうか．

だがこれは，ミルの「言葉の意味に，その語の指示対象の実在は含まれない」という説から推論した場合の考えで，実際には話はそう簡単にはいかない．ミルは本質命題と偶然命題(essential, or merely verbal propositions and accidental, or real propositions)を区別する．ある語を，その語の共指示内容（の一部）で述語づけるのが本質命題であるから，共指示内容以外のことを述語づける場合，あるいはそもそも共指示内容を持たない固有名が主語である場合，命題は偶然命題ということになる．そして偶然命題は，前章において見たように，事実に関する事柄を主張する命題であり，その真偽を問うためには，主張されているところの人・ものについての現実を知っている必要がある．ミル自身は，「おばけは肉体を持たぬ霊魂である（本質命題)」と「おばけが，殺人犯のカウチに取り憑いている（偶然命題)」を例に挙げ，後者の場合，少くとも発話者がおばけが存在していることを信じていると考えなければ，何がいいたいのか分からない文であると述べている．

だがそれでも，「おばけ」という語が現実に存在しているからといって，

この語が指示するものが現実に存在するなどとは言えまい．指示対象が実在しない固有名についても同様であろう．

指示対象が実在しない固有名（確定記述を含めて）において，フィクションの中に登場するものや，かつて実在したもののように，どのような性質を持っていると考えられているか，あるいはどのような性質を持っていたかがはっきりしているものと，ラッセルの例として有名な「現在のフランス国王は禿である」のようなものとは，かなり事情が異なる．ミルも述べているように，世の中にはジョンとか佐藤とかいう名の人は数多くいるし，ある確定記述も（例えば「今，銀座４丁目の交差点を横断している，29 才の，後頭部が禿げた，水色のシャツの男」），ある時点ではある特定の人・ものを指示することに成功しても，異なる時点においては異なる人・ものを指示し得る．こうした語がどの人・ものを指示しているのかを特定する場合，我々はコンテクストに依存している．だが，「現在のフランス国王は禿である」は，発話の時点が王政下なら真偽を問えようが，現時点ではフィクションの中に登場する訳でもないし，現実にフランス国王がいる訳でもない．こうした文こそ，真偽が問えない，ナンセンスな文といえるのではないだろうか．これをラッセルのように偽と見做すのは，（この文の否定も真とはならず偽なのだから）奇妙なことであるし，王政下で，有髪の国王が存在する時にこの文が述べられた場合にそれが偽であるとするのとは，「偽」と判断する判断の仕方が全く異なるように思われる．

偶然命題においては，発話時点を含めたコンテクストが，名の指示対象の決定に大きな役割を果している．アベラールにおける，「定言への現実の干渉」も，発話時点に左右されるという意味で，コンテクストに依存しているということを表しているように，思われる．だがその一方で，アベラールとミルとでは，前者が定言の真を主語である名の指示対象の実在と不可分のものと考え，後者はそうではないという点では大きく異なる．ミ

ルの場合，ダートマスの例などを挙げた彼の言葉からも分かるように，一般名の場合は勿論，固有名についても，一度その語が何を指示するかというルールが定められたなら（一般名の場合は，一度ある語が，ある属性のくみ合わせを持つものを指示するというルールが定められたなら），その語の指示対象の実在は，語の実在から保証されるようなものではない．またそのような保証は必要でもない．実際もし主語となる名が常に実在するものであるなら，前章で三つに分けられたコプラの用法のうち，実在を表すaのような文は，何ら情報量のないものとなる．だが明らかに我々はそうした文で情報を伝えることもあるのである．

＊　　＊　　＊

さて，このようにして二人の哲学者の説を見ながら，言葉と実在の関係について考えてきた．二人共，架空のもの・実在しないものの名を含む文についても，何らかの積極性を認めようとしている点では一致していると言えるだろう．どんな語も，どんな記号，それを有意味なものとして用いている人間がいるからこそ有意味なのであって（有意味にするための規則があり，それを理解する者があるからこそ有意味なのであって），そうした人間がいなくなったあとまで，それらの記号が有意味性を保つのかどうかは疑問である．そう考えれば，架空のものの名などを含む文の意義をそうした想像物を考える人間の実在に求めるアベラールの考えは，不自然なものではないだろう．だが，人間の実在を欠かすことはできないだろうが，ともかく，言葉というものは，一度どのように用いられるかについてルールを持てば，実在・現実の側の事情とは独立に（もちろんそれらを反映はするが），意味を持ち得るだろう．そう考えれば，ある名辞とそれに対応する指示対象の実在を不可分のものとし，名辞の表すもののうちに実在というものを含めてしまうことは，危険なことであり，実際，誤りであると言えよう．だがいずれにせよ，論理学の中で，架空のもの，実在しなくなったものなどの名を含む文の真偽を問う可能性というものは，曖昧な

ものである．この小論で我々は，二人の異なる哲学者の説の検討・批判を通して，この問題に何らかのアプローチを試みたつもりだが，さて，読者諸氏はどのように考えるだろうか．

注

I. 本章の担当は町田である．

(1) 例えば，ブラバンティアのシゲルス，「『ひとりの人間も実在しない場合に，人間は動物である』は真か」が挙げられる．また，ダキアのボエティウス等に「カエサルは人間である」についての言及がある．次の論文を見よ，
Sten Ebbesen, 'Talking about what is no more. Texts by Peter Gornwell, Richard of Clive, Simon of Faversham, and Radulphus Brito', Cahiers de l'Institut du Moyen-Âge Grec et Latin, 55, 1987.

(2) 例えば，ジャン　ビュリダン，「ソフィスマタ」II. 3 を見よ

(3) William & Martha Kneale, 'The Development of Logic', Oxford, 1962. p 264（以下 DL. と略す）

(4) Petrus Abælardus, 'Dialectica', ed, L. M. de Rijk, 1956, 2nd ed, 1970. p 187.（以下 D. と略す）

(5) D. p188

(6) D. p279
... Cathegoricarum autem propositionum veritas, que rerum actum circa earum existentiam proponit, simul cum illis incipit et desinit. ...

(7) D. Introduction, pXLVII.
a. 'est' is a predicate signifying existence,
'Socrates est.'
b. 'est' has the force of an existential quantifier,
'Homo est animal.'
c. 'est' has only the sense of 'Vocatur',
'Chimera est opinabilis.'

(8) D. p163

(9) 述語動詞が常に時間を伴うことを 'Consignificatio temporis' と古来，呼んでいる．筆者は，このことを本章では，時制の干渉とみなし，アベラールは，述語動詞のみならず，コプラ一般にもこれを拡大してあてはめようとしているのではないか，と考えたい．アベラール自身の述語動詞に対する説明は，例えば，次の箇所にはっきり表されている．
... vere 'currit' significat tempus, quia praesens tempus; ... con-

significat enim nunc esse, idest rem suam ut existentem, in cursu scilicet, praesentialiter. ...
'Logica Ingredientibus' ed, B. Geyer, Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters xxi1–3, 1919–1927, p354.（以下 LI. と略す）

(10) LI. p361 'chimera vocatur chimera'.

(11) D. p134 ... ut nichil aliud 'ego nuncpor Petrus' quam 'ego sum Petrus' intelligatur. ... 及び D. p138（強調は筆者による）を見よ.
Unde mihi, si profiteri audeam, illud rationabilius videtur ut rationi sufficere valeamus, ut scilicet, *quemadmodum oppositionem in adiecto secundum oppositionem magis quam secundum appositionem sumimus*, ita 'accidentalem predicationem' accipiamus, ac cum dicitur, 'est homo' vel 'est opinabile' vel 'est album' pro uno verbo 'esse hominem' vel 'esse album' vel 'esse opinabile' intelligamus.

(12) D. p167　　d. 'Homerus est poeta.'
　　e. 'Chimera est opinabilis.'

(13) これが kneale のアベラールへの批判の要点である.
DL. p208 を見よ

(14) D. p137

(15) D. p135「(われわれの) 先生」とは編者によれば, シャンポーのギョーム (?). 尚, 構文論 (constructio) 的表現と命題の真偽とは, 文法学的及び論理学的に, どう異なるのかを現在さらに検討中である. cf. Petrus Helias, 'Summa super Priscianum'. vol I-II. ed. L. Reilly, Toronto, 1993.

(16) D. p168–p169. この時, ホメロスその人自身を指さない.「ホメロス」を「ディクターメン 'dictamen'」とアベラールは呼ぶ. しかし, では,「ホメロス」がかの人を指していないのなら, d. における「詩人」において一体何が理解されるというのか? 当然の疑問であろう. アベラールが続けて言うのには, ... aut si 'Homerus' nomen est dictamnis, quid in 'poeta' intelligitur? ... (D. p169) そして, 結局 d. はこう言われるのである, 即ち, ... Hic est enim sensus: 'poema Homeri est poeta'. ...「ホメロスの詩が, 詩人である」という意味であると. (ibid.)

(17) そうは言っても「現実 'actus'」が, 常に時間との相関で考えられるべきものなのかは, さらに検討の余地がある. つまり, コプラに対する時制の干渉は, 様相的であるかどうか, という点について何らかの探究が必要と思える. この点, II 章で述べる J. S. ミルは, はっきりした考えを持っているようである. 彼にとってコプラに対する時制の干渉は, 様相的である. この説は, 大変, 論理学史的にみて, 興味深い.

(18) D. p162 ... Atque si hoc ubique 'est' verbo deputetur ut aliquid existentium predicet, falsa est propositio que proponit 'chimera est opinabilis vel non-homo vel non-existens'. ...

(19) LI. p175 ... Sic etiam cum dicimus chimaeram esse opinabilem, nil attribumus chmaerae, sed potius monstramus animam alicuius opinari chimaeram. ...

(20) D. p137–p138 ... Proprias autem locutiones eas quoque enuntiationes cur non dicamus in quibus non-existentium nomina ponimus ? Sicut enim chimera proprie *non-homo* dicitur, hocest unum ex his que non sunt homines, cur non etiam *opinabilis* diceretur, idest unum ex his de quibus opinio habetur, quippe eadem exstitit ad non-existentia nominum suorum impositio que ad existentia suorum. Sicut enim dictum est in impositione '*hominis*' '*dicatur ista res homo*', sic etiam dictum est in huiusmodi re non existente: '*dicatur ista res opinabilis*', ut sic etiam non-existentium nomina inventa sint ad agendum de ipsis secundum hoc quod 〈in〉 impositionem veniunt, sicut existentium ad agendum de ipsis, veluti cum dicitur: '*chimera est chimera*' vel '*opponitur ut homini* vel *alicui alii*'. ... 尚, 〈 〉内は編者の挿入である.

(21) Willem Remmelt de Jong, 'The Semantics of John Stuart Mill', D. Reidel Pub, 1982. p148–p150

(22) Arthur Prior, 'Time and Modality', Oxford, 1957, p107.

(23) John Stuart Mill, 'A System of Logic', collected works of J. S. Mill, Routledge, vol 7, 1973, p81. (以下 SL. と略す)
That which we affirm to be past, present, or future, is not what the subject signifies, nor what the predicate signifies, but specifically and expressly what the predication signifies; what is expressed only by the proposition as such, and not by either or both of the terms. Therefore the circumstance of time is properly considered as attaching to the copula, which is the sign of predication, and not to the predicate.
尚, 訳中 ( ) 内は本章筆者の挿入である.

II. 本章の担当は山口である.

(24) D. p137

(25) SL. p118

(26) SL. p33